

■追悼文

平林洋美先生を偲んで

土屋清澄（高エネルギー加速器研究機構）

4月12日朝、突然、「昨夜、平林先生が急逝された」との報が届いた。あまりにも思いがけない知らせに、頭が凍りつく思いがした。2週間前の3月末には、いつもとかわらぬ様子で高エネルギー加速器研究機構にいられており、昼食を共にした。「また4月からもダイヤモンドフェローとして来るから」と、嬉しそうにおっしゃって帰られたのが最後のお別れとなってしまった。

先生との最初の出会いは、1972年、高エネルギー物理学研究所の最初の大学院受託学生として泡箱グループに加わった時であった。それ以来、約36年間、先生の周囲で色々な経験をさせて頂き、多くのことを教えて頂いた。機器開発には「大胆さと注意深さ」が必要であること、企業との機器開発の進め方、などなどである。

水素泡箱の頃を思い起こしてみると、試運転時には常に制御盤前にどっかりと座り込み、時々居眠りをしながらも、的確に指示を出しておられたこと、トラブル発生時には真っ先に現場に駆けつけられたことなどが思い浮かぶ。泡箱の仕事と並行して、先生は、「今後は超伝導マグネットが高エネルギー物理にとって必要不可欠である」との見通しから、パノフスキー型超伝導四極マグネットの開発を開始された。当然ながら、「お前も手伝え。これからは泡箱ではなく、超伝導マグネットだ」と言われ、その手伝いを命じられた。先生にとっても、超伝導マグネットを手がけるのは初めてのことであり、種々な試みを共にした。畑に捨てられているフライス盤を拾ってきて、コイル巻き線機への改造を試みたり、レーストラックコイルを模擬したアルミ板をバイスに挟んで四極コイルに成形する練習をしたりと、研究とはほど遠い作業の連続であった。それでも、そのような作業を通じて、「開発とは如何に行うものであるか」を教えて頂くとともに、先生の超伝導に対する熱い思いを感じた。

その後、先生はビームチャンネル部門に移られ、12 GeV 陽子シンクロトロンからビームを取り出す1次ビームラインおよびK2, K3 と呼ばれる2次ビームラインの建設を率いられた。この時期には、今日の加速器科学を支えている多くの後進を指導・育成された。また、国内の常伝導マグネットの製作技術の向上

にも力を注がれ、当時、あまり実績のなかった古河電工や東北金属のマグネット技術を大企業のそれに劣らぬところにまで引き上げられた。先生は欧米の新しい技術やアイデアの導入にも非常に積極的で、当時CERNにしかなかったビームを3分割するためのランバートソン磁石や、無機絶縁ホロー・コンダクターを用いた耐放射線磁石の製作を先頭に立って指導され、世界に劣らぬビームラインを建設された。

次に手がけられた大きな仕事として、超伝導 π 1ビームラインの建設が挙げられる。先生は、「真に超伝導技術を発展させるためには、単なる試作・開発ではなく、実用機としての超伝導マグネット製作が必須である」との信念のもとに、強いリーダーシップを持ってプロジェクトを推進された。これにより、我が国における低温・超伝導技術は格段に進歩するとともに、その後の低温・超伝導技術に関わる多くの後進が育成された。この意味において、このプロジェクトは我が国の高エネルギー物理分野における超伝導機器応用の原点とも言えるものである。トリスタン計画では、超伝導機器応用を積極的にリード・サポートし、後進が主体的に仕事を進められるよう所内外の環境整備に尽力された。困ったときには親身になって相談に乗って頂ける相談窓口的役割も果たされた。トリスタン計画により、我が国の超伝導マグネット技術は一気に世界レベルにまで達したが、この立役者が先生であった。

平林先生は、国際的にも広く活躍され、ICFA (International Committee for Future Accelerators) の超伝導・低温工学パネル議長やICEC (International Cryogenic Engineering Committee) の Board member を歴任されるとともに、将来の加速器用高磁場超伝導マグネットの開発、米国SSC計画用超伝導マグネットの開発、LHC加速器にむけた高磁場マグネットの開発など多くの計画を積極的に推進された。先生のすばらしさは、技術の将来動向についての鋭い先見性を持っておられたこと、また、多くの後進を引きつけ、その育成を行う独特の才能を持っておられたことであろう。先生の薫陶を受けた多くの研究者や技術者が今日の加速器や核融合の分野の進歩を支えていることは、これを実証するものである。

先生の突然のご逝去は、まだまだご指導、ご活躍を期待していた私達にとって大きな痛手ではあるが、先生らしい去り方とも思われる。

心からご冥福をお祈りいたします。